
絢髪の渡り世ss

荒畠縄笠山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋髪の渡り世

【Zコード】

Z5461X

【作者名】

荒畠繩笠山

【あらすじ】

緋髪の渡り世 短編集です。時系列はバラバラになります。基本的に陽子・楽俊ベースで、少し甘めになっていると思います。興味がある方のみご覧下さい。

田舎ごと（前書き）

おつねしださんごとひょつと躊躇ったので、息抜きにやつちやつたもので
す。

駄文です。期待せずにお進みください。

人生を一度経験する」とになるなんて、おいらも相当変わりもんだ
と、しみじみ思つ。

おいらがこの生を受けてもう8年たつた。

この世界では人は女の腹に成るのをみて、蓬？かと思つたが陽子の
居た所ともまた違うようだと4、5年前に気づいた。

だつて忍つて職業の輩は道具もなしに火を噴いたり、水や風とか操
つたり、天井を歩いたり。なんかおいらの理解の範疇を超えて、こ
の世は成り立つてゐる。おいらは忍の家に生まれたもんだから、お
いらも使えたりするんだよな。

今、世の中は戦争中で何時この平和な里が壊されてもおかしくない。
だから、おいらはこの生で武術を重視しようと決めた。前世と違つ
てその才能もある。通用するかはもうちょっと大きくなないと分
からぬが、しなければまた頭脳労働すりやいいんだ。うん、なん
とかやるだ。

そして今、おいらは忍びの学校、あかでみーとか言つところに通つ
てる。とつあえず、なんとか優等生で通つてゐる。友人も出来た。ほ
とんどこの里の伝統ある一族でだから、おいらはちょっと浮いてる
かもな。クラスのみんなおいらに良くしてくれる。なんか悪いから、
おいらも相談乗つたり、勉強や実技手伝つたり、おいらで出来るこ
とで返せてると良いな。

そこで、つい最近隣国渦の国から編入生が入ってきた。燃える様な赤い髪、夏の木々の様な濃い緑色の目。思わず「陽子・・・?」とつぶやいてしまい、隣に居たシカクにいぶかしむ目で見られた。なんでもない、と首を小さく振つてそれでも編入生から目は離せなかつた。

件の編入生と会話が出来たのは、それから一週間過ぎた頃。

彼女は他国から来たというだけでクラスで浮いた存在となっていた。おいらはそんな彼女に声をかけたかったが、いつもなんだかんだとタイミングを逃してきた。うん、修行足りてないよね。

今日は偶々先生の手伝いで帰りが遅くなつたんだ。クラスに戻る道の一教室に彼女が頬杖付いて外を見てたんだ。で彼女の唇が「らくしゅん」って動いたように見えた。

「よひこ・・・?」

思わず声かけちまたが、彼女はびくりと肩を震わせてこちりを見返した。

陽子 クシナ
side

渦の国から木の葉の里へやつてきた私は、ミード様に修行を付けてもらいながら忍者アカデミーに通うことになつた。

しかし、現在戦争まつただ中、他国からやつてきた私は周囲から敬遠されている。予想はしていたし、これから人柱力になるにあたり風当たりはより厳しくしかならない。ちょっとため息でてしまう。

しかし、予想外のことも起きた。いや実際どうなのが分からぬけど、アカデミー初日に自己紹介している中で、私を見て“陽子”と呟く男の子が居たのだ。まさかとは思うけど、でも実際私もこうして今此処に居るのだから、可能性はゼロじゃない。その日から私は彼を目で追っていた。

ずっと見ていたい氣づいたこと。それは彼が“彼”であつたこと。決め手となつたのはちょっととしたところで見せる“彼”的癖や、一人称を時々だが「おいら」となつていて。

とっても嬉しいことだが、これで人違いつかだつたら、私は落ちこむを通り過ぎて地面と一体化してしまいそうだ。

今直ぐ確かめたい。でも、彼の周りには多かれ少なかれ人が居る。

前も思つていたけど、やはり人を惹き付ける魅力を存分に持ち合わせている。前のほたほたとしたネズミの姿と、優しい穏やかな表情の人の姿。いつだつて魅力的なのに、彼は「陽子と居るからこんな人が集まるんだよ」つて、謙遜してばかりで、ちつとも自分の魅力に気づいてくれなかつた。おかげでどこに居ても彼を追う異性の目が私を落ち着かせなくしてたし。いつか、私じやない大切な人が出来たりしたらと。

あああーー、いかんいかん。まずは彼が“彼”か確かめなきや。

そんなことを考えてたら、いつの間にか夕暮れ時だ。そろそろ帰らないとなあ、といまだ立つ気が無いでいる。つい「楽俊」なんてつぶやいたら、うしろから「陽子？」と返つて来た。

一人の間に暫しの静寂が訪れる。

しかし、気まずいものではない、互いに互いが信じられない奇跡に驚きが大き過ぎて動けないでいるだけだ。

先に沈黙を破つたのは、楽俊だつた。

「・・・陽子、なんだな？」

「・・・らく・しゅん・？」

声がちよつと震えてしまつた。でも、そんなの今はどうだつていい。

がつったーーん

思いつきり彼に抱きついでしまつた。その反動で座つていった椅子が思いつきり後方に飛んでいった、がそんなの知らない。

体当たりぎみに抱きついたから、ちょっと体勢を崩しかけたけど上手く力を逃がしてくれたようだ。

楽俊は少し呆れた様な苦笑で

「陽子、『慎みを持つて』って」

「だつて、樂俊つて抱きつきたくなるんだ」

だからおいらが悪い、と少し泣きそうな笑顔で宣つ。

そういうえば、前世のネズミ姿の時、抱きつき癖がついていた。その時もそんなこと言つてたな。これつて、動物だからか？ちょっと不満だぞ。

そんな陽子においらは

「桓タイ將軍もか？」

熊の半獣の禁軍將軍だった男の名を挙げると

「違うつ」 と反射で返つてくる。（あれ？）それから眉を寄せて「何でだ？」と聞くものだから、（聞いたのおいらなんだけどな）

「陽子、前に半獣だからつて言つてなかつたか？ や、今おいら半獣じやないんだけどな。・・・それつて、おいらだからつてとつていいのか？」

とけよつと意地悪げに聞いてみる。陽子の目を覗き込むように窺うと、陽子はしばらく間があつて真つ赤になつた。「いや、あの・・・（「」によ）だな。」と口元もついていたが

「へへへへへへへへ。そうだ。樂俊だからだーー！」

開き直りに近い告白を聞けて、おいらが笑つて、陽子もつられると笑つた。

それからしばらくたつても、陽子は人前では“波風君”と呼ぶから、訳を聞いてみた。

そしたら、「“樂俊”つて呼びそつになるんだ。」とつものだから、

「 „ミナト“ つて、呼んでよ」と笑つて言つた。とつても優しく言えたと思つたんだけどな。あとで陽子に

「・・・・ミナトの笑顔は、ある意味脅しだ。反論を許されない感じがしたぞ。」
「。なんでだ？」

出余て（後書き）

荒畠は これ以上やると砂をまきすぎて 乾涸びしきです。

勝負の一（前書き）

ｖｓ キバ母です。彼女をよく知りずして書いてこるので、相違点があるかもしれません。宜しくお願いします。

勝負っ！

「ふーん。でも、ま、あんたが勝つたらひかると認めてやるよーー。」

そうこうしゃになや、彼女の相棒とともに私に飛びかかって来た。

話は数時間前。

まだ、ミナト＝樂俊だと確信する前のこと。木の葉に来たばかりの私は、比較的一人で過ごしていた。

例外は、

「やーー。お前の髪は、トマト色~」

「トマト、トマト、真っ赤なトマト。今日も八百屋と勘違い。何で、学校来てんだか？ヒヤハハハハ

「おまえなんて、皿の上で一人寂しく残されりや 良いんだ。」

うん、こんな風にちよっかいかけてくる悪ガキたちがいるから。そのときばかりは一人でなく、

「・・・・そうこうことは、複数でなく、一人で仕掛けて来なよ。

弱虫がつ！~

と纏めて相手取る。前世での経験と、今世での修行がアドバンテージとなつて、大抵勝敗は一瞬で決まる。

「ぐはっ」「ぎやつふつ」「ひつぐうつうつ

それその、鳩尾、鼻、腹に一発ずつお見舞いして、はい、おしま

い。

今日も今日とて、連勝記録を更新中だよ。・・・あいつらも、そろそろいい加減に学習すれば良いものを。

呆ながら、先程作り上げた山を一瞥して、直ぐにその場を去る。私は、教師の間でもあまり印象が良くないからだ。

それは、今のご時世が戦時中であり、いくら同盟国となつたとはいえ、裏切りなど頻繁に起こりうるものだから。

そういう中では、うちのもの同士での結束が強まり、外を排除しようと自然その傾向が現れる。

わかつっていたことではあるけれど、正直ここまで無関心か敵意しかないのは、辛い。

ちょっとかいかけて来た奴には悪いけれど、少しストレス発散させてもらつてるから、そればかりは有難く思つてる。

初めて木の葉にやつて来て、火影や里の重役たちに面通りを済ませたあと、私はミト様に面会した。

私と同じ赤い髪の綺麗な老婦人のミト様は、同じ故郷の出身で、同じ理由でこの木の葉にやつて来た。
現九尾の人柱力である。

話をしていると、とても優しい人で人を無条件に落ち着かせてくれる。

まだ知らない人ばかりの里で、私が初めて心を許せたのは彼女である。

つたのは道理であった。

彼女は私に「九尾の器となる前に、大切なものを詰め込みなさい。私に残された時間は少ないけれど。それまで精一杯愛を詰め込みなさい。そうすれば、九尾に負けないで済むわ。」と、そつと教えてくれた。

私が木の葉にやつて来た理由である、『九尾の器』としての役目の上での注意事項。

それは、九尾の負の力に引っ張られないことだった。

それは、人柱力の感情に大きく作用され、人柱力が負の感情で支配されると、九尾の力が強まり、封印が緩むばかりでなく、支配しようとしたり、人柱力の体を破つて解放しようとするらしい。

そのとき、風船がぱあんと割れるイメージが頭に浮かんだが、それが自分だと思うと途端に引いた。

その回避の唯一の方法がさつきのそれらしいが、

はー。ミト様、私貴方が言つてくれた言葉を実行出来るのか、本当に不安です。

愛するものを見つける前に、まず現段階（敵意・無関心）をどうにかしないと。

そしてアカデミーで私は、伸す、声をかける、無視される（自然と去られる）の繰り返し。

それが3日ばかり続くと、もうそろそろ萎えて来た。

くつ、だが、私はめげるものか。

そんな今だが、唯一私の感心事があるから、まだ諦めずにいられる。確信していなけれど、でも、そうであつてほしいこと。それは、彼が彼であること。

まだ、話しかけるタイミングが掴めないだけで、彼からそんなことをされたことが無い、ということが私の唯一の希望であり、愛せるかもしない可能性だ。

自然と私の目は彼を追う。

少しでも、共通点を見つけるために

いつものように、教室の隅で彼を視線で追っていた私は、背後から急に声をかけられた。

「おい、お前。あたしと勝負しな！」

振り向けば勝ち気そうな女の子が一人。私に向つて敵意をぶつけてくる。

え、この子誰だっけ？

side ツメ

あたしのここ最近の日課は、つい最近入つて来たばかりの余所者を観察すること。

普通は無関心を通すのだが、ここまで周囲がそうであると、逆に気になつてしまふのが性だ。

そこで気づいたのは、そいつは結構強いことと、あたしの仲間の人をずっと見ていることだ。なんだ、こいつもミーハーか。そいつが見ていた奴はこのアカデミーで1・2を争う人気者だ。

そんな奴が気を引くのはもう決まり事に近いから、それだけなら後は無関心で通していく気だつた。

だが、そもそも言えない事態になつていていた。
なぜなら、

そいつを見る、件の奴の視線に気付いたからだ。

仲間の名は、波風ミナト。

あたしたちの中で、頭脳、戦闘力共に優れた優等生。

しかも、奴は容姿と性格も良いもんだから、アカデミーで1・2を争う人気だ。

そんな奴が、初めて異性に感心を持つたらしい。

「……まあ、どうでも良かった。

だけど、それが余所者のあいつであつたことが非常に気がへわない。

これでもし、ミナトがどつかに行つてしまつたら、何としても止める！

外様なんかに、あたしの仲間は誰一人として渡さねないねえ。

そんなつもりで、初めてそいつに声をかけた。

「おい。お前、あたしと勝負しなー。」

side クシナ

いきなり目の前に現れた少女と、犬に驚いたが、更に喧嘩を吹っ掛けられて、今の私の機嫌は悪い。

「……貴方に喧嘩を売られる覚えは無いんだけれど。私何かした？」

普段なら、軽く流せたものも、最近苛々が溜まっているせいか、喧嘩腰に返してしまった。

はあー、何してるんだ自分。

直ぐに撤回しようと思つたが、相手もやる氣満々で、今更引っ込みがきかない。

流れに任すかと、自棄氣味にことの展開を見るに至る。

これでも中身は、千歳以上。
のはず、

外身の年齢に引っ張られて、若くなつたようだ。

「あんたが何かした訳じゃないけどね。 しいていえ、あたしが気
にくわぬからこいら辺で決着付けよつてわけさ。」

そういうた彼女は、名乗ること無く理由を話す。

「いまではつきとと言われてしまえば、もつ清々しく考え思つ。

「そり。別に媚び売る氣もないから、近寄らなきやこいんじやない
？」当たらぬ神に祟り無しだよ。

「そいつはあたしの性分じゃないんでね。あたしがしたいようにす
るのが一番良いんだ。だから、あんたにや悪いけど付き合つてもら
うよ。」

教室の出来事だつたものだから、そこから移動して外の演習場に下
りた。

人が数人いたものだから、そいつらも一緒に引き連れて私たちの周
りを囲む。

「お前ら、見世もんじやねえんだよ。怪我したく無きや引っ込んでな。」

実際戦つてみてから分かったが、彼女の攻撃は周囲ににも結構な被害が出る。

それに加えて、彼女は野次馬にも被害が出るようにわざと攻撃を外したりするものだから、ある程度身を守れるようじやなきや見学なんて出来やしない。

それを知っているもんだから、言われた瞬間さつと散つていき、残つたのは数人だ。

「ふんつ。腰抜けどもが。タダ見しようもんならそれなりの対価払えつてんだ。」と吐き捨てた彼女は、こちらに向き直り構えを取る。それに応戦してこちらも身構えた。その前に一応確認を取る。

「まだ数人いるけれど、その子たちは良いの？」

「ああ。あいつらは危なくなる前に勝手に逃げるさ。」

そちらの方向に一瞥をくれると、ふんつと鼻を鳴らして、口の端を上げにやりと笑う。どうやら彼らは彼女の友人のようだ。

黒髪を縛った男子に薄い金髪の男子。小太りの男子が離れたところからこちらを見ている。それからもう少し離れたところから、長身メガネの寡黙そうな男子と、わたわたと落ち着き無くこちらを窺う女の子の計5人。他の野次馬たちは教室まで帰つていったようだ。

アウエーで戦う身としては、今の状況は微妙だが。彼女を心配したことだらうから、特に文句を言つ氣はない。

「それならいい。私としても怪我人が出てもううど困るから、助かるよ。」

「あんたがあいつらに何かしようとしたら、こいつらが止めに入るだらうけどね。まあ、あんたは賢そだからしないか。」

少し雰囲気が柔らかくなつたが、それでもまだ突き刺さる敵意は衰えを見せない。

わざと攻撃をしようものなら、即彼らに止められるのは分かつていたし、それ以上に自分の立場を悪くするだけでメリットの無いことをする気なんてさらさら無い。

本当なら、この一方的な喧嘩も避けたかったが、この現状を打破する切欠が欲しかつたのもある。

どう転ぶか分からぬが、この勝負なんとしても勝つ！

それなりに気合いも入り、2人の間に緊張が支配する。風に乗つて来た葉が2人の間でひらひらと舞つ。

葉が、地面についた。

だんつ ぱつ

「四脚の術！」「土遁 土流壁！」「

最近覚えたばかりの性質変化の技で様子を見る。

すると彼女だけが、それに体当たりしてきた。どうやら、犬は参戦しないらしい。只の体当たりだったが、かなりのスピードのため威力はありそうだ。

私が作り出した壁はあえて精度を弱くした。もちろん直ぐに壊れるが、乾いた土で造つたもろい壁は土煙を上げ、田くらましには有効だ。

今の攻撃で、彼女はスピード重視の接近戦を得意とするであろう事が分かる。

そう瞬時に判断した私は、彼女から距離を取つて、こちらは忍術で勝負だ。

「ふーん。これを避けるとはね。次こいつはどつよつ！..」

離した距離を一気につめてくる。繰り出したのは鋭い突き。躰すのは予想されていたので続く蹴りにも対応出来た。さらに続く連撃に一発入る。脇腹を狙っていたのは分かっていたが、その前にこちらが蹴りを放つたその足を取られてしまい大きく体勢を崩したのが悪かった。重い一発で腹を押されたかったが続く攻撃を流すため堪え、クナイで応戦。流石に向こうも素手で対抗する訳にいかず、武器を取り出すその隙に煙玉を破裂させた。そして、異なる種類の煙玉を取り出し、結界術で煙玉の範囲を狭くし、それをアタックの要領で相手めがけて打つ。

予想外の攻撃と、煙玉に混ぜていた強烈な臭いに彼女は距離を取らざるを得ない。

その進路沿いに、先程の煙玉のどさくさに紛れて投げたクナイに取

り付けた閃光札（起爆札に模して造った試作品だ。殺傷力は無いが、混めるチャクラの量に応じて光量の加減が可能）が破裂。加減はしたので、一瞬目が眩むくらいで済む程の光を浴びて目を閉じた。その隙について掌打を叩き込むが、紙一重で躰され目を閉じたままこちらに向つて手裏剣を投げる。

「……やるじゃないか。ツメが犬塚と知つての攻撃なら有効だろう。」

「うん。でもさつきのツメの攻撃も、彼女きつそうだよ。」

「ああ。それよりさつきあいつがやつた煙玉の効果を限定する結界術。あれは土遁よりも精度が上だつた。そっちが得意分野なんだろうな。」

外野でこちらを窺つていた3人の会話が耳に入った。

まだ、全てを出し切つた訳ではないけど、冷静にこちらの情報を分析している。

確かに、私の得意分野は結界術だ。

土遁の精度は鍛度に差があるのは明確だが、それだけでない確信が彼にはありそうだ。

一瞬目が合つた黒髪の少年につっこり笑う。すると、何とも面倒くさそうな顔をされてしまった。

うん。後で絶対聞こう。

距離を取ることに成功し、改めて今いた場所を見る。

大技を使っている訳でもないのに、私たちの戦いでアカデミーの演習場はぼろぼろだ。

もちろん、これを修繕するのもお金がいる訳で。あとで、火影様辺りから説教を聞かされるだろ？

確定されたあまり本意でない未来を思い現在を見る。

・・・・ここまで来たら、もう同じだよね。久しぶりに本気出していいかな？

太い木の枝に降り立つて印を組んでいく。「うずまき一族秘伝の一つ鎖の結界術の応用。媒体となる糸にチャクラを送り込み鎖状に具現化する。

その鎖を細く長く、何本も作り出す。そして、それらを縫つて一本の綱にした。

「・・・さつきは油断しちまつたが、一度は効かないよ。それにそつちもまだ手え抜いてんだろう？そろそろお互い本気出さないかい？」そして彼女の犬を呼ぶ。「あんつ」と鳴いた子犬は忍犬だったようで、隣に並び立つ姿は様になつていてる。

あちらが2人でくるのなら、こちらもそれなりに条件を出させてもらおう。

聞き入れられるかは分からぬけれど、ダメ元で提案した。

「ああ。それから提案なんだけど、勝敗に何か賭けないか？」

彼女から5間離れた地面に降り立つ。口端を上げた彼女はさも可笑

しゃうにその提案に乗つて來た。

「いいねえ。それじゃ、あんたが勝つたらあたしはあんたを認めてやるよ。」

え、相手の権利を自分で決めるの？

これには少し驚いた。普通、自分がしてほしいことを言つものだと思つていたから。どうじょうか。

「・・・・それじゃ、こつちは貴方が勝つたら私は必要以上に貴方には近づかない。」

特に思いつかなかつたから、“気にくわない”と先程言われたためそう言つてみた。受け入れたくないければ、拒否するだらつ。

これに彼女は

「呑んだ。」と一言返して來た。

「受けた。」

交渉成立だ。

そのときの3人の会話は聞こえていなかつたが、こんなことになつていたらしい。

「なんで、あいつら相手の権利を言つてんだ？」
「さあ？意外と気が合つのかもね -あの2人。」

黒髪と小太りが先程の会話に突つ込む。金髪も同意見のようだ。

「んじゃ、結局あいつらなんで喧嘩してんだ?」

「「やあ?」」

女ってわかんねえー、と3人がこの2人を称する時よく使つ言葉がこの時生まれた。

そして、さりに後方で2人の勝負を見守っていた者たちは

「ツメちゃん、なんか生き生きしてきましたね。」

「ああ。しかし、2人とも少しばかりやり過ぎだ。」

「うん。そろそろ止めに入つた方が良いでしょうか?」

「おそらく、シカクたちもそのつもりで至近距離で見てているのだろう。ならば俺たちは連絡係にまわつた方が良いだろ?」

この後の動きを確認して、決着を見守る2人だつた。

見学者たちの心境を余所に、2人の試合の決着は着こなとしていた。

「決着を付ける前に、もう一つだけいいか?」

「内容によるね」

「何故私のことが気にくわないのか、それだけは教えてくれないか?」

「?」

「あんたが勝つたら、追加で教えてやるよ。まあ、負ける気なんて無いし、条件は遵守してもらつから関係ないさ。」

「絶対負けない。」

「ふふ。そうこなくつちや。面白くないねえ。
・・・・ふーん。でも、ま、あんたが勝つたらちやんと認めてやる
よ！！」

そう言つなり、彼女と犬は一斉に飛びかかる。

それから、私たちの勝負に決着がついた。

結果は、痛み分け。勝敗がつく前に、過激になつて来た私たちの戦いにとうとう止めが入つてしまつた。

彼女は虫の大群に周囲を囲まれ、ひるんだ隙に伸びた影に捉えられ、それでも動こうとするので女の子が懇願してやつと落ち着く。私は同じく虫の大群が目の前に現れたため、急遽結界で隔離して、体勢を整えようと後退したところ、小太りの子と金髪の子に押さえられた。

勿論抗議に出た私たちだが、そこに居た全員から「やり過ぎだ」とお小言を貰い、勝負は一時お預けとなつた。

でも、このことが切欠でその場にいた全員と改めて自己紹介しあつた後、それなりに親交が続いている。

なんだかだ言つた彼女・ツメともその後親交を持つことに成功した。

勿論、この日の出来事を後で聞いてみた。すると

「ああ、あれかい？ もう忘れてくんない。あんたはあたしの仲間だからねえ。」

と、肩を組まれて笑顔で言つたツメと

「ああ。まあ、大したことじやないが、チャクラの形質に特徴があつたんでな。血継限界のたぐいかと思つたんだよ。」

ほんの些細なものがと、シカクはつづまきのチャクラの特性に気づいていたらしい。恐るべし。

勝負つー（後書き）

ありがとうございました。

こちらは、時系列もバラバラに書きたいものから順に書いていく予定です。

割り込みなども入ると思いますが、宜しくお願ひします。

if? 生存ルートで+ ～波の国編～（前書き）

いきなり飛びます。すみません。

しかも、その世界に多数転生していたら、という設定。

後で修正入ります。宜しくお願いします。

「ナルト……、そつち行つたよー。」

「はいはーーい。…おおつと、『ごめん、サクラー止めてー。』

「ほらほら、おいでおいで。そつそつ、怖かつたねー。もう大丈夫だからねー。」

「・・・僕ら、別に怖がらせたかったわけじゃないんだけどな。」

「まあまあどりあえず、任務完了。ふう、やつと帰れる。」

ネコ捕獲任務を完了させ、火影の執務室に報告に戻った7班メンバ
ーは、次の任務を待つていた。

なぜなら、またもや火影がいない。

「あー。ほんと、『ごめん?』

「いや、ナルトのせいじゃないってわかつてゐるから。」

「全く、陽子たちもしょうもないはね。」

そこへ、執務室のドアが音を立てて開いた。

「少しくらい良いじゃないか。」

「あれが少しと言つなら、忍の修行は遊びだよ。」

「ちょっとは気晴らししないと、息が詰まつてしまつ。」

「頼むから、少しは自重をしてよ。」

入つてそつそつ、中に居たものをほつたらかしにして、痴話喧嘩を
始める二人。

言わざと知れた、この部屋の現主、四代目火影こと波風ミナトに、
その妻のうずまきクシナだ。

後から、7班担当上忍はたけカカシが入つて来る。

報告の為に、火影を呼び戻しに行つていたのだ。

「あの、二人とも。そろそろ現実に帰つてきてください。」
呆れた様子を隠さず、二人を止める。

そしてやつと、二人は辺りの様子に気づいてくれたようだ。

「いや、ははは。」めん。
「じゃあ、力カシ隊第7班の次の任務は、芋ほ…、いや、これにし
ょうか。」

そう言って、机の上に散在している書類の中から、埋もれて隠れて
いた1枚を取り出す。

「Jランク任務だけど、一般人に毛が生えたような相手しか来ない
だろうから、君達でも十分通じるだろう。」

そこへ今まで黙っていた海野イルカが待つたをかける。

「火影様、お言葉ですが、こいつらはまだアカデミーを卒業したば
かり。もう少し任務に慣れさせてからの方がよろしいかと……。」
それに反論を返したのは、サクラだ。

「先生。そつは言つても、今までの任務は家の手伝いレベル。

「これくらい出来て当たり前です。」

「そうですよ。修行するなりごぞ知らず、任務で少しは実戦に慣れ
ておかないと。」
続いてサスケ。

「大丈夫だよ、イルカ先生。一般人より少しレベルが高くて、そ
れでも僕らの方が強いから。」
とナルト。

「まあ、上忍の力カシも付いているんだし、少々強くても逃げるく
らいなら出来るんだし。」

「そうです。まあ、何とかしますよ。」

最後に火影とカカシに言われてしまい、渋々引き下がる。

「あ、言い忘れていたけれど、里の外に出るから一応変化していっ
てね。」

サクラ以外狙われる可能性が極めて高いメンバーだ。

ある程度売れているカカシはともかく、うちは一族のサスケと火影
の嫡子で四代目にそつくりなナルトはまずい。

とこ「」とで、

「お待たせ～～～。久しぶりにズボン以外の格好したから、足が冷えちゃうわよ。」

「何か本当懐かしいね。この姿の方が随分長かつたけれど、それだけこちらに馴染んだつて事かな？」

「なんじゃあ、お前ら。おめえら、さつきの坊主どもかあ？」

そこに居たのは黒髪お下げの女の子と、髪を束ねた少年だ。先程会った、どこのに居ても目立つ金髪オレンジの少年と、正反対の白と黒を基調とした少年の姿が無い。

そして、会話を聞くにこの2人があの2人のどちらからしい。つくづく忍者という人種は特殊だあ、と思うタズナだった。

「サクラは変化しないの？せつかくだからやるつよ。」「そうね。それじゃ・・・。」

ポンッと音と煙が立つ。

そこから現れたのは、青い髪のきれいな少女で、これまたタズナを驚かせるには十分だった。

「・・・どうかしら？」

美人が笑うと自然その場に居たものたちも笑つてしまふ。

「うん。ちゃんと変化出来てる。」

「ばつちりだよ。」

「・・・お、お前から何か一気に雰囲気変わったなあ？」

「まあね。先生折角なので、ちょっと衣装もそろえて旅の一一座風を装いませんか？」

これだけ見目麗しい少女が2人も居て、只の旅人じゃつまらないと、黒髪のお下げの少女の提案により、急遽そういう設定のもと、任務が始まった。

しばらく歩いていると、先に水たまりが見える。

ここ最近の天候は不安定で、局地的に、突発的に雨が降ることがあり、水たまりが在ったとしても不思議ではない。

しかし、不自然な点が一つある。

周辺の草が乾き、枯れ始めていたのだ。
まだ僅かだが青い部分も在る。今日のこの青天と乾燥氣味な空氣で
一気に枯れ始めたのであろう。

だからその近くにあるはずの無いものが在れば、それは不自然となる。

力カシは瞬時にそう判断し、少々警戒をする。
しかし、メンバーにそれを伝えることはせず、暫し様子を見る」とした。

「そう言えば、タズナさんの居る波の国には忍者はいるの？」
そうナルトが聞いて来た。それに答えたのは力カシ。

「いや、あの国には忍びは居ないはずだよ。ま、だからこいつして任務に出でいる訳なんだけどね。」

あそつかと納得し、それじゃと黒髪お下げに変化したサスケが聞く。
「今回の任務はCランク。忍び通しの戦いはBランク以上だから、
今回の任務には関係なさそうですね。」

「ま、そういうことだ。」

と言いつつカカシはタズナの方を盗み見る。忍びの戦闘と聞いて少
しばかり目線が泳いでいる。

これはもしかしたら、そつなる可能性が出て来たようだ。

そして、例の水たまりを通り過ぎる。

その際、少女に変化した2人は股越さないよつ、少し遠回りして通
り過ぎたため、隊列が崩れた。

元の隊列に戻るとする前に、その陰に潜んでいたものは動き出す。

一番最初に狙われたのはカカシ。後ろから鋼糸でハツ裂きにされる。
それに驚くタズナを瞬時に背に庇つたのは近くに居たサクラ。
少し離れた位置に居るナルトとサスケは、直ぐさま応戦する。

ナルトに狙いをさだめた忍びは、大釜を振るつて攻撃するが、動き
が大き過ぎて避けるのは難しくはない。

これなら小細工無しでもいけると判断し、クナイを相手にめがけて放つ。狙うは、眉間だ。

勿論弾かれ、その弾いた瞬間の死角となつたところで、一気に背後を取り首に手刀をお見舞いする。

サスケの方もけりが付いたようだ。

あちらの忍びは鎖釜を使用していたらしいが、そんなに大した腕ではなかつたようで、その鎖をクナイで封じられ、引っ張られる形で身動きが取れなくなつたところを、顎に一発蹴りが入り昇天したようだ。

2人を気に縛り上げると、『苦労様』と氣の抜けた声がした。

そちらにじりりと3人の視線が集まる。

「いや～。手際良かつたよ。でも、こいつら中忍にしてはレベル低そうだから、こんなでつけ上がらないようにな～。」

間抜けそうに今までの戦闘の感想を述べる。勿論、このくらいでつけ上がることは無いが、この上忍に對してちょっといらっしゃついたのは別の話である。

そんな自分たちを見て、タズナは何故と問うた。

「お前さん、何で生徒にやらせた？」

「見ての通りこいつらだけで十分でしたし、たとえ無理だとしてもこの程度の忍びなら一瞬で片が付きます。」

ならなんで、と問いつめてくるタズナに

「おじさん。嘘はいけないよー。忍びに狙われてるならひやんと言わなくちゃや！」

と抗議したのはナルト。

「ぼくらは一般人より少し強い程度で、忍びの戦闘は初めてなんだ。これがもつと強い忍びだったら、僕たちにも死傷者が出るかもしれませんなかつたんだよ？！」

どうしてこんな嘘をつくるの？！

怒るナルトを下がらせ、カカシはタズナに問いかける。

「・・・私たちは、盗賊程度の護衛として任務を受けました。しかし、実際は忍びがやって來た。これは契約違反になります。こいつの言つた通りそうなつていたかも知れない。何故こんなことを？」
静かに有無を言わさぬ雰囲気で問いつめるカカシに、タズナは渋々と訳を話す。

「わしらの居る波の国は、超貧乏じゃあ。本當なら、この護衛を雇うのも一杯一杯じやつたがどうしてもあの橋を完成させんといかん。あの橋が完成しさえすれば、貿易が盛んになり、波の国にお金が入ってくる。そうすれば、差額の金額を払うことが出来るんじや！！頼む。どうかこのまま護衛を続けてはくれんだろうか！ー！」

そう言つて頭を下げるタズナに

「お前らはどうしたい？」
と聞いて來た。

「・・・確かに虚偽はいけないことだわ。これで死んでいたら取り返しがつかないもの。」

「

「でも、僕たちはまだ生きている。」

「そうね。・・・私はこのまま続行しても構わないけれど、みんなは？」

それに、ナルトとサスケは頷いて同意した。

それを見て代表してサクラがカカシに申告する。

「私たちは続行しても構いません。但し、これ以降何かしら虚偽の申請があつた場合、即刻撤退を希望します。」

それを聞いたタズナは

「ありがとう。恩に着る。」

とさりげに深く頭を下げた。どうやら、ナルトの言葉が効いたようだ。

その後、それまで以上に警戒レベルを上げ波の国までの護衛に当たつた。

if? 生存ルートで+ ～波の国編～（後書き）

ありがとうございました。

この設定では、次で終わらせます。たぶん。

もしかしたら、サバイバル演習編を書くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461x/>

緋髪の渡り世ss

2011年10月23日02時13分発行